# 講　　演

## アメリカ土木学会の現状について

——26年2月6日日本工業倶楽部に於て講演——

ゲール・エー・ハサウェー

## ASCE OF TO-DAY

(JSCE. Feb. 1951)

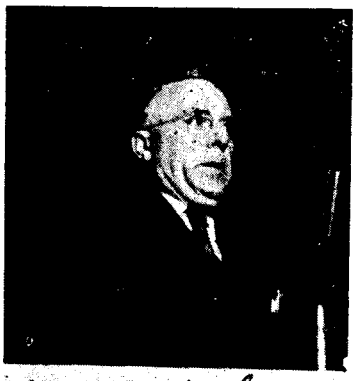
*Gail A. Hathaway, President of the ASCE.*

**Synopsis** Mr. Gail A. Hathaway spoke of "ASCE of to-day" at the meeting held by JSCE on February 6th at the Japan Industry Club, Tokyo.

He revealed that the Society expanded just double in size comparing with some 15 years ago. He also stated about the social standing as well as activities of its members, and emphasized that the railroad enterprise was an important field where civil engineers could enjoy their mission, at the sometime he hoped that civil engi neers would be more active in human society too. He disapproved the recent tendency of the young civil engineer joining the labor union.

**要旨**　本文はアメリカ土木学会長ハサウエー氏が訪日せられた機会に我が土木学会のために2月6日，日本工業クラブに於て講演せられた記録である。先ずアメリカ土木学会が 15 ケ年間に約2倍となり 30 000 人の会員を有し，各方面に発展し特に若い会員が非常に多く，それ等の会員は官庁，顧問技師，請負業等に活躍しているが尚政治方面にもつと進出すべきことを強調せられ更に氏は土木技術者は労働運動に参加することは好ましくないと述べている。

日本の土木学会の会長三浦氏並びに高貴の方々及び淑女紳士諸君，私は今日，日本の土木学会の会長から書面の御招待をいただきまして，非常にありがたく存じます。私はアメリカの土木学会の会員の好意を，日本の土木学会の会員の皆様にお伝えしたいと思うのであります。



Gail A. Hathaway

私は日本に着きまして，日本の土木学会の方々に歓迎を受け，特に山崎博士御夫妻にはいろいろ御親切に御案内をいただき，ありがたく感謝しております。また私がインドの会議に出席している間に，吉田さんと御懇意になり，そのときに吉田さんから，アメリカの土木学会の大体の模様，どういうことをしているか，また我が土木学会が現在持つている二，三の問題などについて，何か話をするようにということを伺つたのでございます。

私はお話を進めます前に，一つ前のことで，アメリカの土木学会の方々で，日本へ訪問された人のことを申し上げたい。おそらく皆さんも御記憶だろうと思いますが，1929 年に東京で，最初の万国工業大会が開かれたときに，アメリカの土木学会からは相当多数の代表者が日本へ参つたのであります。その中で特に土木に関係する方面で今は亡くなられましたが，当時この部会のチエヤマンをその会合でおやりになりましたエルマ・スペリーさん，私の親友であり且つ敬慕しておつた，今は亡くなられましたがトンネルの専門家のロバート・リツジウエイさん，もう一人，これも亡くなられましたが私の親しくしておりましたD・C・ヘニーさん，これらの方々が日本にそのとき来られました。おそらくこのお集まりの方々の中には，御記憶の方もおありになることと思います。

こういう学会については，専門の方面とか，あるいは一般社会との接触面とか，いろいろ伴いますが，特に財政の方面が，大抵どこの学会でもつきまとうものであります。私の土木学会は，アメリカの学会の中でも一番古い学会でありまして，1852 年に創立されま

* アメリカ土木学会長，アメリカ国防総省技術総監付技術顧問

した。ただいまでは3万名の会員を包擁しておりますが，やはり御多分にもれず，財政的な困難には直面しているのでございます。

私の土木学会は，ただいまも申し上げました通りに現在会員が3万程ございますが，今から約 15 年前の1935年には，会員の数はわずか 15 000 であつたのであります。この 15 000 の会員のうち約2割は，正会員でなく，青年の会員 (Junior Member)で，年令も若く 28 歳以下くらいの人で占めておりました。この青年会員は会費も，正規の会費ではなく 10 ドル乃至15ドルで割安であります。正規の会費は，ニューヨーク地区では年に 25 ドルですが，そのほかは20ドルであります。ところが 1950 年になると，会員の数が3万，ちようど倍になりました。青年会員の数もやはりふえまして，今ではこの3万の中の約4割が准会員です。従つて土木学会の構成要素は，約半分近くが若い人たちで成立つているのでございます。

特に私が土木学会の会員に若い者が多いということをここで強調したいと思うのは，若い人が多いためにこの会が非常に活発になるのであります。なるほど若い会員は，会費も正会員より幾らか少いのでありますが，今日の若い者は，明日の成人，老人となるのでありまして，これが土木学会が元気づくゆえんだと考えるために吾々は特に注意を払つて居ります。この席の皆様にもこの点を強く申し上げたいのであります。

土木学会の会員になるのには，むろん大体の資格が必要でありまして，その人の信用状態とか，あるいは学歴とか，そういうものが必要でありますが，各学校の生徒の団体の中にまた土木関係グループ (Chapter, section) を各所で持つているのであります。そうしてやがては学位をとれるように勉強しているのでありますが，その学生だけで各方面でやつているものが，約1万から各所に存在しておりまして，これは先ほど申し上げた現在3万の会員の外であります。之等の学生員が青年会員になる場合には，入会金なしで，会費を納めればいきなり来ても入れることになつておりまして，若いメンバーを非常に歓迎しているのであります。

もう一つ，この会の機構を活用して行く上に大事なことは，地方のオルガニゼーションであります。各地方々々に支部 (Chapter, section) を置きまして，その地方の状況に従つて，専門に関する問題とか，あるいは政策に関する問題とか，そういうものを本部の幹部へ相談をする，あるいは指示を受けるというようなことで，各地方々々にそういう支部を設けることが大切だろうと思います。今こういう地方の支部が，全部で 71 ケ所あります。そのうち5ケ所が国外，残りがアメリカの中にあります。ヴエネズイーラとか，ブラジルとかポート・リコ，ハワイというような所にもこの支部がございます。

世の中にいろいろ共通の問題が起りますときに，われわれの職業的専門人の相互結合の使命が一層重要になつて参るのでありますが，そういう意味合いから，ここに各種技術部門を包含する合同会議が必要になります。それで土木，電気，機械，鉱山，化学，各部門から成る合同技術者会議(Joint Engineers Council)がございまして，今申し上げた各部門の前会長だつた人達が選ばれ参加するのであります。私は今は土木学会の会長でありますが，この勤めが済みますと今度は，普通の会社でしたら重役会というような，合同技術者会議のメンバーになつて仕事をするようになります。つまり会長を一年勤めれば，会務の様子も相当わかるようになるので，今度は理事会というか，重役会というか，そういうもののメンバーを勤めるのであります。

この合同会議の重な目的は，第一に，利用できる資源を通して，人類の一般の福祉を増進する。同時に工業上のエンジニヤリングの職業の技能をもつと発展させ，それを通して人類の福祉を増進する。第二は，各方面の技術の部門に応じて，お互いに協力を促進して，本来の目的を達する。第三は，一国内の問題，あるいは国際間のいろいろな事件に対して，技術の知識が問題を解決するのに助けになるというようなときにそういうものに対する一般の公共政策を発展させる。同時にこの会のメンバーの方一人一人の努力によつてそういう目的を達するというのが，この合同技術者会議の目的でございます。

ただいま申し上げたような高等政策とでもいうか，これを施行するために，委員会がたくさんあります。そのおもなるものをちよつと申し上げますと，最初にはゼネラル・ユニット・コミテイーというのがあります。その次にはエンジニヤーの職業でみんなが一所に共同して行くことを促進する委員会，その次は労働に関するもので，アメリカでは労働組合が若いエンジニヤーを組合に今おいおい引入れようとする傾向があります。こういう傾向は正しいものではないと私は思ひますが，そういう方面に関係する委員会，科学の方の関係の委員会，医療薬品の方でお互いに連絡協調する委員会，土木関係のエンジニヤーの委員会，国内の水利に関する委員会，そのほかに技術者の人才を選択することに関する委員会，アリカの国家的見地からエンジニヤースのことを考える委員会，エンジニヤーの国際関係に関する委員会，このような委員会があります。さて東京に着きましてから三浦会長より，アメリカで

は土木関係の技術者が社会的にどんな地位にあるか，又どの様に活躍しているか等について参考になるようなことを聞きたいという御希望がありましたが，アメリカの土木学会の会員の中で，概略37%は公共の仕事に従事しております。たとえば内務省の開拓庁，陸軍省の技術部及び聯邦動力局そういう大きな公共関係の仕事に従事しておりまして，これはアメカリの政府の管轄のもとにある仕事であります。あるいは国道，県道などの建設のことにも従事しております。あるいは原子爆弾関係の仕事にも多数が従事しております。この73%の人は，会員の中でも選りすぐつた優秀なかつ豊かな経験を積んだ者が当つているのであります。そのほか，約5%がコンサルテイング・エンジニヤーに関係しております。そのほか，多くの割合の会員が学校の教授，あるいは諸負業に従事しております。最近は請負業者は相互に新しい競争をやつており，これに勝つため，優秀な専門的土木技術者を雇ひ入れる様になつてきました。勿論電気や機械の技師も使う場合がありますが上に立つて纏めるのは土木技術者であります。現在すでに分科化して参りましたが中には昔のように政治関係に従事している者もあります。私はアメリカ国会に活躍している土木技術者出身の五，六人の者を知つている。本日此処で参議院議員をして居られる日本の土木技術者の方にもお会いしました。これは大変結構な事で私の考えではこういう方面に土木の人がもつと発展してよいのではないか。もう少し人間味もあり幅のある社会的な人が出てほしいと考えております。

以前は，大きな建設工事が土木の専門家でない者によつてやられておりましたが，このごろでは，本人がそうであるか，あるいは専門の教育を受け，経験のある優秀な者を雇つてそれにさせておりますが大体幹部は土木技術者となつております。ところで設計をしてこれを実際の施工に移す場合には，工事の実施は別なグループがやる，即ち設計監督を行うものと工事を実施する施工者とは明瞭に区分されているのですが，私の考えでは監督部門のようなところにも，もつと土木の技師が入つて行かなければならないと思います。

シビル・エンジニヤーの中には，ハイ・ウエイの部門などがありますが，そのほか，アメリカでは御承知のように大部分の鉄道は私設会社なのでありますが，この鉄道の建設から保守，あるいはその工事の監督，あるいは運営関係も，アメリカの鉄道では土木の専門家が相当に活躍しておりまして，土木出身の人が会社の社長や副社長になつているというのが少くないのであります。そこで将来土木出身の者が次々と社長の椅子を占めて行くために，土木の人をよけいに採用する。それがだんだん経験を積んで，前の社長の椅子を継ぐというように，土木の技師の働くところが鉄道にはたくさんあります。そのほか，水路，灌漑の方面にも同じように，土木技師の働く分野がたくさんあります。

私はこの壇を降りる前に一言申し上げたいことは，アメリカの土木学会は 1952 年にはちようど 100 年に当るので，百年祭を催すことになつております。創立が 1852 年で，ちようど来年が 100 年になります。そのときには6月から9月にかけて，シカゴでその分野の博覧会を開催したいという計画を持つております。

この 1952 年に開く百年祭の博覧会は，メージヤー・レノクスが企画したもので，6月から9月末までの博覧会をずつと監督されることになりました。この方はこういうことに経験のある人であります。これは利益をあげる目的でありませんので，もし利益があがれば，それは適当ないろいろな機関に寄附をするという建前でやるのでございます。

この博覧会はむろん公開のものでありまして，そのおもな目的は，技術の観念を一般公衆にまず紹介すること，それからお互いの技術の研究発達というようなことを目的としてやる会でありますが，ことに9月3日から 13 日まで 10 日間は，各国の機械学会とか，化学学会とか，そういう各国の学会の人に集まつてもらつて，特に専門の会議をやるのであります。そのためにシカゴのスティーブンスホテルと契約して一万の部屋を用意しております。これが実現されたときにはおそらくこの種の会合では，今まで世界になかつたような大きな会合になるだろうと期待しております。また9月 10 日は，特に国際日として，このときには各国からおいでになつた方々が，一堂に会して晩餐会をやる。大体 4 500 名位の大宴会の予定であります。

皆さんの中には，近い将来にアメリカにおいでになる方もあるかもわかりませんが，そのときには私は喜んで招待いたしますから，一年半先のことですが，そのことを心にとめておいていただきたい。やがて近いうちにこちらの土木学会へ，私の方から公式の招待状が届くことと思います。その際は何人でも，御希望の数の代表者をお送りになることを希望いたします。

終りに臨んで，このたびは日本の土木学会の皆さんにお目にかかれたことを，非常に感謝いたします。同時に学会の方々から行届いたいろいろなお手配をいただいて，家内も私も非常に喜んでおります。なお，あと木曜までの間も，いろいろとこまかく日をわけ，スケジュールをこしらえていただきまして，私ども2人の日本の滞在が，非常に愉快で仕合せであつたことをこの際厚くお礼を申し上げます。（拍手）